

# ご近所のお医者さん

  
475  

大阪さやま病院院長 **阪本 栄さん** 一大阪狭山市

## 人生の最終段階

日本人の平均寿命は年々伸び、厚生労働省の2017年簡易生命表によると、男性は81・09歳、女性は87・26歳となりました。総人口のうち65歳以上が占める割合を「高齢化率」と言いいますが、直近では27・7%と報告されています。

だからこそ、人生の最終段階をどう過ごすかはとても大切なテーマでしょう。多くの場合、人生の終盤は医療やケアを受けることになります。そうなった時、自分が望まない医療やケアを受けなければならぬとしたら、どんな気

いながら見送った、という話題が出ました。もし、本人がどんな医療やケアを希望するか意思を告げ、家族や医療者が共有できていたとすれば、それほど悩むこともなかったかも知れませんが。

とはいえ、元気なうちから人生の最終段階を考え、話し合うのは何となく気が引けるものです。そこで、これを支援するための「ACP」(アドバンス・ケア

## 意思決定支えるACP

・プラン  
・ニッケ  
という考

高齢化の傾向は42年まで続くと予測されています。これは、長寿社会である一方、「たくさんの方が亡くなる社会」とも言えます。

人間には誰しも寿命があります。だ

持ちになるでしょうか。家族の心情はどうでしょうか。

府医師会は先月、人生の最終段階に

おける医療に焦点をあて、「大阪の医療と福祉を考える公開討論会」を開催しました。この模様は、今月17日の本紙に特集記事が掲載されますので、ぜひご覧ください。討論会の中で、病気が原因で自分自身の意思表示ができない状態となり、家族や医療者が戸惑

えが注目されています。ACPは、事前に患者が主体となって将来の医療・ケアについて家族や医療者と話し合い、意思決定を支援するプロセスのことです。これまでの暮らして大切にしてきたこと▽人生観や価値観▽希望する医療やケア▽自分がどう生きたいのか―など、さまざまな機会に、気軽に話し合っていたらいいと思いませんか。

(府医師会理事)

